

大学生を対象とした箱庭制作後の言語的やりとりの検討

—自己理解を促すための質問—

藤岡美紀・石田 弓

Examination of the linguistic exchange after the miniature garden work for a college student:
The question for urging self-understanding

Miki Fujioka and Yumi Ishida

これまでに箱庭制作後の言語的やりとりについて言及されてこず、箱庭制作後の作品についてどのように取り扱うかが課題であると指摘されてきた。青年期では、自己理解教育が必要であるといわれていることから、本研究では自己理解を促進させるために箱庭制作後の言語的やりとりにおいてどのような質問ができるのかについて明らかにすることを目的とした。まず大学生を対象に収集した箱庭制作後の語りから、クライアント用箱庭療法面接のための体験過程スケールをもとに新たな評価基準を作成した。次に、自己理解を促進すると想定した質問によって表出された語りを新たな基準を用いて分類し、各質問の特徴を明らかにした。その結果、自己像に関する質問では自己像のイメージが生じた時の違いによって自己理解の促進の程度に差が見られることが明らかになった。また一番印象的な玩具に関する質問では、個人的体験が語りに反映されやすく、自己理解が促進されやすいことが明らかになった。

キーワード：箱庭制作、言語的やりとり、自己理解を促すための質問

問題と目的

1. 青年期の心理的課題と箱庭制作

青年期では、今の自分自身をどれだけ正確に捉えているかを把握し、更に深めていく自己理解教育が必要であり、近年その技法として SCT などが提案されている（青木，2010）。本研究では、青木（2010）に基づき「自己の内面のあり様や感情に目を向け、自らについて捉え、自己を知ること」を自己理解の定義とし、自己理解の促進を目的とした技法として箱庭制作を取り上げる。

箱庭制作とは、砂や玩具を用いて砂箱の中に作品を制作するというもので、青年期に有用であると考えられる特徴を有している。まず、砂と戯れることで適度な心理的退行を促し、少しずつ自己の内面の深い部分が表出される（木村，1985）ことが挙げられる。次に描画法では、画力に自信がないために描き渋る人がいる一方、箱庭制作は既製の玩具で制作でき、制作者の自己表現に対するモチベーションを高めることができる（河合，1969）ことが挙げられる。

2. 箱庭制作に関する課題

箱庭療法における制作後のやりとりについて、従来はただ見ているだけ（河合・中村，1993）で、作品を味わい、楽しむような気持ちで（河合，1969）いることが強調されてきた。それは、作品の解釈などによって制作者が自由に制作できなくなったり（木村，1985）、多義的なイメージを一義的な言葉にすることでイメージが固定化されたりする（中野，2010）恐れがあるためである。しかし、実際には言語的やりとりが含まれている（平松・池見・山口，1998）こともあり、箱庭制作過程や作品に関して制作者が説明を行うことは、制作者の自己理解の促進に寄与する（楠本，2012）など、近年、その肯定的側面が示されてきた。しかし、具体的なあり方については言及されず、箱庭療法を実践する初心者は作品の扱い方に戸惑いを感じることも少なくない（平松ら，1998）。したがって従来の姿勢に加え、自己理解を促すために箱庭制作後の言語的やりとりにおいてどのような話題を取り上げられるか検討する必要があると考えられる。

なお箱庭療法では、制作場面に立ち会う者の存在が重要といわれている（岡田，1984）。本研究ではそれを「立会者」と呼び、便宜上箱庭療法で用いられている「治療者」と区別することとする。

3. 箱庭療法面接のための体験過程スケールについて

箱庭制作後の言語的やりとりを捉える方法に、平松ら（1998）の箱庭療法面接のための体験過程スケール（Experiencing Scale for sand-play therapy：以下 EXP_{SP} スケール）がある。体験過程とは、クライアントが面接中に話した内容そのものよりもその人の内面における体験のあり方に着目する概念である（平松ら，1998）。Gendlin（1955）は、体験過程についてクライアントの内側で進行し感じることができる全てのこと、特に感情的な側面を強調している。その後、体験過程に対する距離を測定する体験過程スケール（Experiencing Scale：以下 EXP スケール）（Klein, Mathieu-C & Kiesler, 1970；池見ら，1986）が考案され、それを箱庭療法面接に応用したものが EXP_{SP} スケールである。

EXP_{SP} スケールはクライアント用と面接者用があり、それぞれ7段階の評定基準を持つ。本研究における自己理解の定義によると、クライアント用体験過程スケール（以下 C-EXP_{SP} スケール）の段階5は自身の感情や体験に目を向ける段階であり、段階6以降は自分自身について気づき、捉え、自己を知る段階であると考えられる。したがって、段階5以降の語りが表出されやすい話題がどのようなものかを検討する必要がある。しかし、C-EXP_{SP} スケールの評定基準には曖昧さがみられる。たとえば段階5にある【探索的な説明をする】とあるが、それを判断する基準が示されていない。したがって、平松ら（1998）で示された例文以外にどのような語りが存在するのかを検討するとともに、その語りから新たな評定基準を作成する必要があると考えられる。

4. 本研究における箱庭制作後の言語的やりとりについて

自己理解を促進する言語的やりとりの検討にあたり、言語的やりとりの方法を検討する。まず、従来の箱庭療法のように自由に言語的やりとりを行う場合である。この方法は、自分の感情を捉えにくい人（三木・光元・田中，2005）にとって、イメージが広がりにくいと考えられる。

描画法では、描画後の質問（Post Drawing Interrogation：以下 PDI）が行われており、自己理解を促進させることや、検査者が描画を解釈する際の資料を得ることができるといわれている（高橋，1986）。しかしながら、PDIは問に対する回答という形によって語りが収束しやすいと考えられる。

一方、高橋（2007）は、描画者と検査者の対話という意をこめて、描画後の言語的やりとりを Post Drawing Dialogue（以下 PDD）と呼び、質問によって描画者の語りを展開させている。この方法は、制作者が限定された話題について思うままに回答をすることができるため一問一答になりやすく、従来望まれた制作者の心の動きにできるだけ従うという姿勢を守ることができると考えられる。

以上より、ある程度の質問が設定されつつ自由に語らせる方法であれば、制作者のイメージの流れが守られるうえ、自己理解を促進させる可能性があると考えられる。よって、本研究における制作後の言語的やりとりを「制作者の自己理解を促進することを目的として、立会者が箱庭制作過程に関して焦点化した質問をし、それに対して制作者が自由に語る」と定義する。なお、制作者に始めから深い体験過程を要求することは難しいとされている（平松，2010）ため、まず自由な説明を求めた後、より上位の段階に評定される語りが引き出されるような質問を行うこととする。

次に、質問内容を検討する。第一に、自己像に関する質問を取り上げる。平松ら（1998）は、クライアントの感情を探索し広げることを促す質問の1つとして自己像を取り上げている。箱庭療法では、必ずしも作品中に制作者と同一視し得る人（物）が存在するとは限らないため、自己像について尋ねないとされている（河合，1969）が、質問によって視点を与えることで自己理解が促進される可能性があると考えられる。また、皆藤（1991）は、風景構成法において自己像の位置と動作について尋ねる試みを行っている。しかし、自己理解されたかどうかは検討されていないため、箱庭制作に導入することで制作者がどのように感じ、語りに反映されるのかを検討する意義があると考えられる。以上より、質問 A-1「この作品の中で、あなた自身、あるいはあなた自身がいると思う場所はどこですか」を設定する。そして、語りが収束しないようにより詳しい説明を求める質問 A-2「そのこと（自己像）について、もう少し詳しくお話していただけますか」を設定し、さらに C-EXP_{SP} スケールの段階 5 に相当する語りが表出されると想定できる質問 A-3「それを置いた時、どのようなことを思われましたか」を設定する。

第二に、一番印象的な玩具に関する質問を取り上げる。箱庭制作で選ばれた玩具は、制作者の現実における体験や感情を想起させる（楠本，2012）。よって、一番印象的な玩具に着目することは自らを振り返るきっかけとなり、段階 5 に相当する語りがより表出されやすいことが期待できる。以上より、質問 B-1「あなたが一番印象的だと思った玩具の一つ教えてください」を設定する。そして質問 A と同様、質問 B-2「そのこと（印象的な玩具）について、もう少し詳しくお話していただけますか」、質問 B-3「それを見つけ、置いた時、どのようなことを思われましたか」を設定する。

5. 本研究の目的

本研究では、青年の自己理解を促進させるために、箱庭制作後の言語的やりとりにおいてどのような質問が取り上げられるかを検討する。まず既存の C-EXP_{SP} スケールの曖昧さを減少させるために、制作者の語りをもとに新たに評定基準を作成することを第一の目的とする。また、言語的やりとりにおける制作者の語りと言語的やりとりの後に行う質問紙調査によって、自己像と印象的な玩具に関する質問の特徴を明らかにすることを第二の目的とする。この時、①制作者の語りの段階がどの程度に到達したか、②制作者の自己理解が実感として得られたかの2点に着目する。

研究 1

目的

既存の C-EXP_{SP} スケールの評定基準には曖昧さが見られるため、判別し難い語りが存在すると考えられる。よって、大学生を対象に収集した箱庭制作後の語りから新たな評定基準を作成する。

方法

1. 調査対象者

大学生 24 名（男性 2 名，女性 22 名）。平均年齢は 20.7 歳（ $SD=1.00$ ）。

2. 手続き

調査の流れを Figure 1，各教示を Figure 2 に示した。なお，立会者は筆者が担当した。

(1) 調査の説明

口頭で調査の流れを説明した。

(2) 箱庭制作段階

河合（1969）を参考に，〈ここにあるもので，この砂箱に自由に作品を作ってください。これでいいと思ったら，終わりを教えてください〉と教示し，箱庭作品の制作を求めた。制作者から質問された場合は最小限の回答にとどめ，原則〈あなたの思うように自由に制作してください〉と伝えた。制作中は言語的やりとりを行わないこととした。

(3) 言語的やりとり段階

①言語的やりとり開始：〈これから，箱庭制作についてお話をお聞きしたいと思います。無理のない程度に，思うままに自由にお話をしてください〉と教示した。

②自由な語り：〈この箱庭作品について自由にお話してください〉と教示した。

③質問：調査協力者を無作為に 2 群に振り分け，それぞれを自己像についての質問（質問 A）を行う A 群，一番印象的な玩具についての質問（質問 B）を行う B 群とした。制作者からの自発的発言が見られなくなったら，次の質問を行った。

A 群

質問 A-1

〈この作品の中で，あなた自身だと思うものあるいはあなた自身がいると思う場所はどこですか〉

質問 A-2

〈そのこと（質問 A-1 で示されたもの）について，もう少し詳しくお話していただけますか〉

質問 A-3

〈そこにあなたがいることについて，どのようなことを思われましたか〉

B 群

質問 B-1

〈あなたが一番印象的だと思った玩具を 1 つ教えてください〉

質問 B-2

〈そのこと（質問 B-1 で示されたもの）について，もう少し詳しくお話していただけますか〉

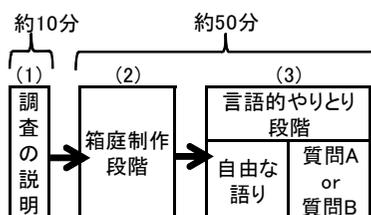


Figure 1 調査の流れ

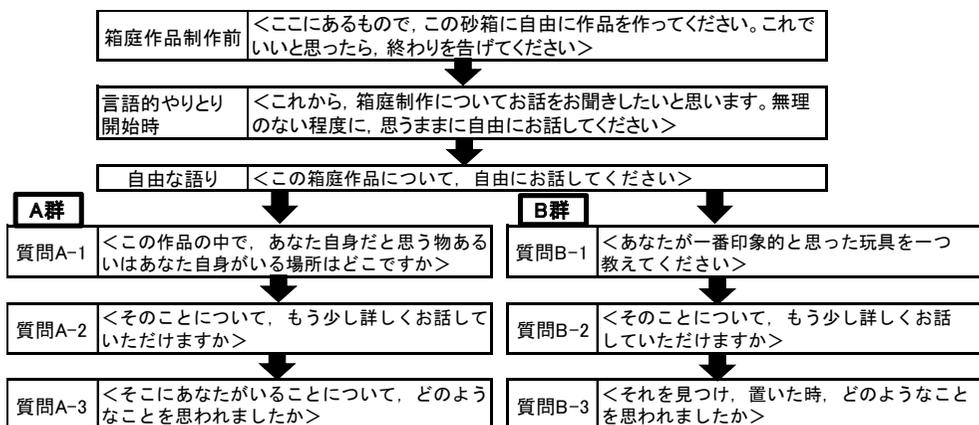


Figure 2 調査における教示

質問 B-3

〈それを見つけ、置いた時、どのようなことを思われましたか〉

制作者の語りに対する立会者の基本的な態度は、以下の通りとした。

- ・制作者の回答に対して、立会者は共感的態度で制作者の言葉を反復した。
- ・制作者の語りを省略・付加する等、意図的に誘導しないようにした。
- ・立会者は設定された質問以外に質問を追加しないようにした。
- ・各質問に対し、制作者からの自発的発言が見られなくなったら次の質問に移行した。

結果

逐語化した制作者の語りを、C-EXP_{SP} スケールより筆者を含めた大学院生3名で分類したところ、評定者間で不一致な箇所が多数生じた。そのため、評定者間で話し合い、先行研究に示された評定事例（平松，2010）を参考にしながら新たな評定基準を作成した。各 Table の上部は平松ら（1998）から抜粋したもので、下部は本研究における新たな基準を一覧にしたものである。

1. 段階1について

平松ら（1989）で示された例文からは、「素っ気なく最小限の発言」に該当する具体的な語りを判

断することが困難であった。平松（2010）に示された評定事例から、段階1全体の評定基準を【箱庭表現について、制作者の感情や体験が付与されておらず、発言に広がりが見られないもの】とし、平松ら（1998）の【素っ気なく最小限の発言】を【感情が語りに付与されておらず、返事をするのみ】に改定した。また、平松ら（1998）の【自発性がなく】を【語ることを終える意思表示をしたもの】、【前の発言の繰り返しのみで、新しい内容が付与されていないもの】に改定した。また、平松ら（1998）の【箱庭表現について言及しない場合】に該当する語りから、【質問について問い直しをしたもの】、【作品や表現に言及されておらず、質問に対する感想を示したもの】を作成した（Table 1）。

2. 段階2について

平松（2010）で示されている評定事例を参考に、段階2全体の評定基準を【感情が付与されない制作時の説明や、場面の説明】とし、平松ら（1998）の【箱庭表現について、自発的な説明をする】を【表現された場面や玩具の説明をしたもの】、【制作過程について言及したもの】に細分化した。

さらに、平松（1998）に示された例文に見られなかった段階2全体の評定基準に該当する語りから【テーマを説明したもの】を作成した。また、作品から受けた印象というよりも、あるイメージに基づいて作ったという語りから【イメージを説明したもの】を作成した。また、「～感じ」という言葉が用いられているが感情が付与されていない語りから、【「～という感じ」を単純に用いて作品について説明したもの】を作成した。また、制作者の感情が説明に付与されていても、今回制作された作品とは別の作品について説明している語りから、【感情が語られるが、制作された作品とは違う仮想の作品について言及したもの】を作成した。さらに、作品から単なる出来事を思い出したということが明確に示されない語りから、【作品から単なる出来事を思い出していると想定されるが、明確な説明でないもの】を作成した（Table 2）。また、平松ら（1998）に倣い、段階5の評定基準に

Table 1 平松ら(1998)および本研究における段階1の評定基準と語りの例

		評定基準	語りの例
段階1	平松ら (1998)	箱庭表現について、素っ気なく最小限の発言をするだけか、自発性がなく、全ての発言は面接者の質問に答えているのみ	「別に意味もなく置いただけです」 「これは〇〇です」
		箱庭表現について言及しない場合も一段階とする	「来月から係長になります」
本研究	感情が語りに付与されておらず、返事をするのみ 語ることを終える意思表示をしたもの 前の発言の繰り返しのみで、新しい内容が付与されていないもの 質問について問い直しをしたもの 作品や表現に言及されておらず、質問に対する感想を示したもの	感情が語りに付与されておらず、返事をするのみ	「はい」 「そうですね。特に気にせず」
		語ることを終える意思表示をしたもの	「そのくらいです」 「はい。自分で話せるのはこのくらいですかね」
		前の発言の繰り返しのみで、新しい内容が付与されていないもの	「このおばさんの服の感じが合ってるなという感じで」 「たぶんはみ出していないと思うんですけど」
		質問について問い直しをしたもの	「自分でここにいるっていう事ですか」 「僕自身の心境でもいいですか？」 「答えになっていますか？」
		作品や表現に言及されておらず、質問に対する感想を示したもの	「ふふふ。なんか自由…なんか自由って難しい」 「うーん(困ったように立会者を見る)」

Table 2 平松ら(1998)および本研究における段階2の評定基準と語りの例

		評定基準	語りの例
段階2	平松ら(1998)	箱庭表現について、自発的な説明をする	「〇〇を置きました」「〇〇の場面で」
	本研究	表現された場面や玩具の説明をしたもの	「日本じゃない。外国の町、田舎の町っていう設定で、教会があったりとか、お店があったり、人が自由に行き来しているのどかな。人もちらほら。のどかな感じの町です」 「あの一 いろいろ波乱はあるけど、結局はハッピーエンドで」
		制作過程について言及したもの	「それで川を消して」 「全体としてはそんな感じで作りました」
		テーマの説明をしたもの	「えーっと、テーマというか。テーマは、朝の閑静な住宅街で」
		イメージの説明をしたもの	「田舎の方のおばあちゃんと暮らして、そしてまた日々戻ってくるようなそんなイメージですね」 「イメージはなんか、ヨーロッパの方というか」
		「～という感じ」を単純に用いて作品について説明したもの	「いるような、いないような。なんかそんな感じ」 「たぶんこれは夫婦ですかね。今思いついたんですけど、両方仲良い感じで。で、この辺の人たちは割と最近来た感じ。やあ、あなたもですかっていう感じで」
		感情が語られるが、制作された作品とは違う仮想の作品について言及したもの	「もう一回やるんだったら、シルバニアのようにしてみたい。こっち(シルバニア)見てたら、かわいいと思うんですけど」 「大人を使ったら、たぶんSFみたいな感じ」
		作品から単なる出来事を思い出していると思定されるが、明確な説明でないもの	「来年ニュージーランドに行くんで、ニュージーランドの羊が好きなんですけど」

記載された【質問について答えていても、自分自身が感じ、考えたことについても述べていない場合】は、段階2と評定することとした（Table 5）。

3. 段階3について

平松（2010）で示されている評定事例を参考に、段階3全体の評定基準を【箱庭表現の説明に感情が付与されているが、作品の説明が重点的である語り】とし、該当する語りから評定基準をさらに細分化した。平松ら（1998）の例文の「怖いライオンです」、「ゴジラが怒っているんです」に該当する語りから【作品の登場人物がどう思い、どういう状態なのか説明したもの】を作成した。また、「寂しい感じがしたので〇〇を置きました」に該当する語りから【制作時に感じ、考えたことをもとに制作過程を説明したもの】を作成した。さらに、「玩具を置いた事によって、〇〇を思い出しました（単なる記憶、出来事として）」に該当する語りから【箱庭表現から思い出された単なる記憶・出来事が反映された説明したもの】を作成した。また、「〇〇を置かないと落ち着きません」、「ここに人を絶対置きたかった」、「こっちから〇〇してほしかった」に該当する語りから【箱庭表現や制作過程について、体験や感情の表明が明確でないもの】を作成した。さらに、言及する対象が自分自身と玩具のどちらにも捉えられる語りも見られた。これは平松（2010）ではみられないが、感情よりも作品そのものの説明が重点的に語られるという段階3全体の評定基準に基づき、【制作者自身について、箱庭表現や玩具を介して説明したもの】、【使用された玩具に対し、印象、感情を付与して説明したもの】を作成した（Table 3）。

4. 段階4について

平松（2010）に示されている評定事例を参考に、段階4全体の評定基準を【体験や感情に重点が

Table 3 平松ら(1998)および本研究における段階3の評定基準と語りの例

	評定基準	語りの例
段階3	平松ら (1998)	箱庭表現について、落ち着かない、寂しいなど、個人的な感情が説明に付与される 「怖いライオンです」 「ゴジラが怒っているんです」 「寂しい感じがしたので〇〇を置きました」 「玩具を置いた事によって、〇〇を思い出しました(単なる記憶、出来事として)」
		個人的な体験や感情が表明されているが、それほど明確ではなく、箱庭表現に関連して語られる場合は三段階とする 「〇〇を置かないと落ち着きません」 「ここに人を絶対置きたかった」 「こっから〇〇してほしかった」
本研究	作品中の登場人物がどう思い、どういう状態なのか説明したもの	「この三人を、この人は怒っている」 「このアヒル2匹と目が合ってびっくりしている」
	制作時に感じ、考えたことをもとに制作過程を説明したもの	「家の後ろが、殺風景になったので水鳥を集めました」 「本当はこのペンギンをもっとこの箱庭の海のゾーンを大きくして、一番寒い所に持っていきかけたんですけど」 「町にも動物がいた方が良かったのでそれと猫を置きました」
	箱庭表現から思い出された単なる出来事が反映された説明したもの	「最近、友だちとの間で卒業旅行とかの話をして。なんかどっか行きたいなあっていう。なんで、ここ…」 「よう、花柄着とるねみたい。言われますね。やっぱり好きなんだと思いますね」
	箱庭表現や制作過程について、体験や感情の表明が明確でないもの	「なんかごっちゃにはしたくなかったんで。今と。洋風なのと、この昔のやつと一緒ににはしたくなかったので」 「うーん、そうですね。自由に動かしていきたいくらい」
	制作者自身について、箱庭表現や玩具を介して説明したもの	「うわあどうしようって感じではなく、たぶん、なんか、この状況を受け入れている感じかなあ。もしいたとしたら」 「ここに一緒に住むと言うイメージではないですね。…(中略)…遊びに来てリフレッシュして帰るという感じですね」
	使用された玩具に対し、印象、感情を付与して説明したもの	「いっぱい動物がいたらいいなと思って。でもなんか、普通だったら共存しないじゃないですか。けどなんか、こうやっていっぱいいる仲良くして楽しくて。なんか、人になついている恐竜とか」

おかれているもの】とし、該当する語りから評定基準をさらに細分化した。平松ら(1998)では、【全体の印象】と記載されていたが、作品中の一部分に対して感じたことなどの語りも見られたことから、【箱庭表現に対して感じたことを重点的に語ったもの】に改定した。また、作品に対してだけでなく、制作時や後に感じたことについて重点的に振り返る語りも見られたことから【制作時・後に感じ、考えたことを重点的に語ったもの】を作成した。さらに、探索的な説明とも、新たな気付きが得られた語りとも捉えられないような語りは、段階5に至らないものとしてみなしたことから、【探索に至らないが、作品から感じたことを語ったもの】を作成した(Table 4)。

5. 段階5について

段階5全体における評定基準はどのような語りが探索的であるかが明記されていないため、平松(2010)で示されている評定事例を参考に、該当する語りから評定基準をさらに細分化した。

まず、先行研究(平松ら, 1998; 平松, 2010)によって示された例文に「～かな」を多く用いた語りが見られたことから【「～かな」を用いて語ったもの】を作成した。また、「わからない」を用いた語りも見られたことから【「よくわからない」と、自分自身も捉えきれず明確な説明でないが、自分の感情などに目を向け、捉えようとしているもの】を作成した。また、「なんか」の多用や「～というか」というような言いなおしをする語りも見られたことから、【「なんか」や言いなおしを用

Table 4 平松ら(1998)および本研究における段階4の評定基準と語りの例

		評定基準	語りの例
段階4	平松ら(1998)	箱庭表現自体よりもむしろ、箱庭に対する体験や感情が説明の主題である。全体の印象、自分の感じ(フィーリング)を語る	「自分で見ても素敵だ」 「すごく迫力があると思う」 「よく見ると気持ち悪い」
	本研究	箱庭表現に対して感じたことを重点的に語ったもの	「作って見たら、全然そんなつもりはなかったんですけど、なんか3つにわかれちゃった気がして」 「すねている感じが、面白いなと思って」
		制作時・後に感じ、考えたことを重点的に語ったもの	「自分もこうアニメとか子ども心みたいなのが、すごくあると思っているので結構こういうのを作って楽しかったです」 「どう使うんだろうと思いつながら。最後、砂の使い方を間違っているなと思ってへんだな。いや、まいいかと思って…」
	探索に至らないが、作品から感じたことを語ったもの	「…(略)…のんびりできそう。それに楽しそうだなあって言う感じ。ゆっくり、好きなことをして。のんびりできそう」 「前はすごく自分の中で橋がかかかってなくて、行くつもりっていう選択肢はなかったんですけど、最近橋がかかったかなあって」	

Table 5 平松ら(1998)および本研究における段階5の評定基準と語りの例

		評定基準	語りの例
段階5	平松ら(1998)	箱庭表現(登場人物)について、または自分自身について、感情、反応、内的過程、行動パターン等、探索的な説明をする	「仏像と怪獣がバランスを取っているんだな」 「〇〇と関係があるのかな」 「なんでこんなところに〇〇を置いたんだろう」
段階2	平松ら(1998)	面接者に尋ねられて、題名、自分の位置について答えていても、内的照合過程が明確でない場合は2段階と評定する	例の記載なし
段階5	本研究	「～かな」を用いて語ったもの	「…(略)だから自分はここにいるのかな」 「知らず知らずのうちにこれを見やすい位置に置いていたのかなというのを今ちょっと考えてみたら」
		「よくわからない」と、自分自身も捉えきれず明確な説明でないが、自分の感情などに目を向け、捉えようとしているもの	「まあ、僕もよくわからないんですけど、この橋をどう捉えているかみたいなの、ちょっと難しいですけど。でもなんか、ここで一つ壁があるとイメージしてその赤ちゃんは多分、向こうに行きたい所もあるし、でも行けないというところがあるみたいなの。」 「これが自分だとわかって置いただけじゃありません。なんか、どんな感じにしようかなって。…(略)…なんとなくロバ置いたんですけど。うーんって感じ。その時はそんな感じだったんですけど、今思ったらさっき話したみたいな感じが結構するんで」
		「なんか」や言いなおしを用いたもの	「(略)…なんだろ。競争、なんだろ。なんか、その競争じゃないけど。なんか、なんか場所をとりたくて。なんかこう集まってて。その場所がたくさん、なんか、他のたくさんある場所の中、イスが全部が居場所の象徴で、その中の一つを争っている感じになってて。結構なんか、なんか。うーん、自分の状況じゃないけど、そういうのちょっと出てるなあって途中で気付いて」 「なんかこの箱庭を作るときに、いろいろ選んでたんですけど、なんか現実的な。なんかこういう日本のなあれとか、作るよりは、もう少しなんかこう。理想的ななんか」
	沈黙後、今まで語られなかったことについて説明したもの	「うーん。(23秒)なんか、さっき3つにわかれていた気がするって言ったんですけど、なんかこの猫だけわからないですよ。なんかこいつこっちにいそうな気がするし、こっちに行きたそうな気もするし。なんか豚はこっちにいそうな気がするんですけど、猫だけわかんない。すごい微妙な位置にいるなって思いました」 「そうですね。(22秒)理想かもれないですね、なんか、ここにずっと暮らしたいと言うわけではないんですけど、こういうところがあったらいいなあみたいな」	
段階2	本研究	質問について答えていても、自分自身が感じたことや考えたことについても述べられていない場合	「(20秒)この家？いるとしたら」 「印象的だったのは、一番始めにここに使おうと思ったのはこの裸の小さい赤ちゃん」

Table 6 平松ら(1998)および本研究における段階6の評定基準と語りの例

		評定基準	語りの例
段階6	平松ら(1998)の基準	箱庭表現について、または自分自身について、今まで気付かなかった自分自身の感情や体験が新しく気付かれ、十分に把握され、それが統合される。そして話し手個人にとって意味のある構造が作りだされたり、あるいはそれによって問題の解決が図られたりする。話し手は新しい、または豊かになった自己の体験や自分に対する態度や感情の変化について話す	「これは自分の心境を表しているのだということがわかりました」 「ずっとしんどい気持ちのままできたのだということがわかりました」 「こんな葛藤が心の中にあるのだということに気がきました」
	本研究において新たに設定した基準	箱庭表現または自分自身について探索する過程を経て、感情や体験に新しく気付き、その変化について語ったもの	「えっと、そうですね。うーん。すごくう、作っていて幸せであったかい家族だなあって形で。動物にも考えていてっていうのもしっかりあって。というところで、今の自分のせいかく、生活の結構すごく安定しているというか、あたたかい環境にあるなあと思って。そういった部分でだぶるなあと思います」 「自分やなあと思って…」 「あとから考えると、結構自分なんじゃないかなあって感じがします」

いたもの】を作成した。さらに、沈黙をした後に新たな説明をするような語りも見られたことから、【沈黙後、今まで語られなかったことについて説明したもの】を作成した。また、【面接者に尋ねられて、題名、自分の位置について答えていても、内的照合過程が明確でない場合は二段階と評定する】という平松ら(1998)の評定基準については、内的照合過程の定義が明確でないために評定者間で不一致が生じた。平松(2010)の評定事例を参照すると、面接者からの質問に対し、感じたことや考えたことについて述べないまま、最低限の答えにとどまっているものが段階2に評定されていた。そのため、本研究では【質問について答えていても、自分が感じ、考えたことについて述べていない場合は段階2と評定する】に改定した(Table 5)。

6. 段階6について

平松ら(1998)の評定基準によると、段階6は、自分自身の感情や体験が【統合され】たり、【話して個人にとって意味のある構造が作りだされたり、あるいはそれによって問題の解決が図られたり】する語りの評定されるとある。しかし、先行研究(平松ら, 1998; 平松, 2010)の評定事例からは、上記に該当する語りがどのようなものが捉えられなかった。そこで、本研究で得られた語りから【箱庭表現または自分自身について探索する過程を経て、感情や体験に新しく気付き、その変化について語ったもの】に改定した(Table 6)。

考察

既存のC-EXP_{sp}スケール(平松ら, 1998)を用いた評定では、評定者間で多くの不一致が生じたことから、平松らの評定基準の内容の曖昧さが示されたと考えられる。平松ら(1998)の評定基準の問題点と、本研究における新たな評定基準は以下の通りである。

まず、本研究において制作された作品とは別の作品についての語りが見られた。たとえば、段階 2 において仮想の作品についての語りが見られた。この場合、本研究で作品を制作したことによって自己理解が促進されたと見なすことが難しいため、段階 2 (Table 2) における評定基準とした。

次に、語りの中で制作者自身と作品中の玩具のどちらについて言及しているのか判別し難い語りもみられた。その場合、あくまでも作品の説明であるものは段階 3 (Table 3)、制作者が感じたことが重点的に語られたものは段階 4 (Table 4) における評定基準とした。

また平松ら (1998) の段階 4 の評定基準では【全体の印象】とあるが、作品の一部について言及した語りもみられた。感情を付与した語りの対象がどの領域であっても、作品の説明であるものは段階 3 (Table 3)、感じたことが重点的であるものは段階 4 (Table 4) という評定基準とした。

さらに、ある段階の評定基準に部分的に満たないために、段階を低く評定すべき語りが見られた。たとえば作品から単なる出来事を思い出していることが明確に説明されていない場合の語りから段階 2 の評定基準を作成した (Table 2)。また、作品から考えたことについて語られているが、探索的な説明ではないものは、段階 5 にいたらない段階 4 の語りとした (Table 4)。

以上より、制作後の言語的やりとりにおける語りに対する体験過程の評定基準の曖昧さを減少させることで、評定者間の不一致も最小限となることが期待できると考えられる。しかしながら、基準を精緻化してもなお判別が困難な語りもあると考えられる。制作者の語りは多岐に渡るものであるため、どの程度新たな評定基準を設定することが可能なのか検討する必要があると考えられる。

研究 2

目的

箱庭制作後の言語的やりとりにおける制作者の語りの内容を、研究 1 で新たに作成した評定基準をもとに分類し、さらに言語的やりとり後に行った質問紙調査によって、言語的やりとりにおける各質問の特徴を明らかにする。そのための観点は、①制作者の語りの段階がどの程度に到達し、自己理解が促進したか、②制作者の自己理解が実感として得られたかの 2 点とする。また、この検討によって自己像や印象的な玩具についての質問が、自己理解の促進に有用であるか明らかにする。

方法

1. 調査対象者

研究 1 同様、大学生 24 名 (男性 2 名、女性 22 名)。平均年齢は 20.7 歳 ($SD=1.00$)。

2. 手続き

調査の流れを Figure 3 に示した。

- (1) 調査の説明
- (2) 箱庭制作段階
- (3) 言語的やりとり段階

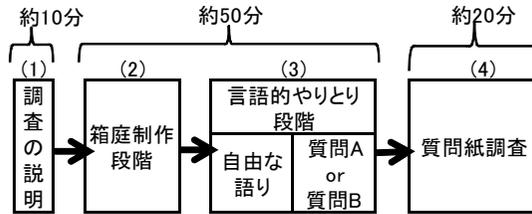


Figure 3 調査の流れ

以上は、研究1と同様。

(4) 言語的やりとり後の質問紙調査

質問項目は以下の通りとした。2件法で行った。

- 1) 質問 A および B で尋ねた内容のイメージはどの時（制作前，制作中，制作後）に生じたか
- 2) 質問 A および B によって，自分自身の気持ちや現実生活に対し目を向けたり照らし合わせたりしたか
- 3) 話し合う中で，自分自身の気持ちや現実生活について新たに気付いたことがあるか

結果

制作者の語りの内容を録音したものを逐語化し，筆者を含む心理学系大学院生3名によって，研究1で新たに作成した評定基準をもとに語りを分類した。

1. 自由な語りと質問 A, B によって表出された語りにおける評定値の出現度数について

質問によって制作者の語りの促進に影響が見られたかどうかを検討するため，自由な語りと質問によって表出された語りに対して評定された段階（以下，評定値）の出現度数を比較した。

(1) A 群における自由な語りと質問 A によって表出された語りについて

自由な語りと質問 A によって表出された語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ，有意差は認められなかった（Table 7）。

(2) B 群における自由な語りと質問 B によって表出された語りについて

B 群には段階 5 までしかみられなかったため，段階 6 を削除して分析を行った。自由な語りと質問 B によって表出された語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ，有意差が認められた。残差分析の結果，自由な語りでは段階 2 が多く，段階 1, 4, 5 が少なかった。質問 B 全体では，段階 1, 4, 5 が多く，段階 2 が少なかった（Table 8）。

2. 質問 A, 質問 B を構成する 3 つの質問項目における語りの評定値の出現度数について

質問 A, 質問 B を構成する 3 つの質問を行うことで，制作者の語りにもどのような違いが見られたかを検討するため，各質問によって表出された語りの評定値の出現度数を比較した。

(1) A 群における 3 つの質問によって表出された語りにおける評定値の出現度数について

各質問によって表出された語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ，有意差が認められた。残差分析の結果，質問 A-1 は段階 2 が多く，質問 A-3 は段階 2 が少なかった（Table

Table 7 A群における語りに対する評定値の出現度数

評定値	制作者の語り				χ^2 値	df
	自由な語り		質問A全体			
	出現 度数	出現率	出現 度数	出現率		
段階1	15	22.4	44	28.4	7.53	5
段階2	14	20.9	27	17.4		
段階3	30	44.8	47	30.3		
段階4	5	7.5	21	13.6		
段階5	3	4.5	13	8.4		
段階6	0	0.0	3	1.9		
合計	67	100.0	155	100.0		

Table 8 B群における語りに対する評定値の出現度数

評定値	制作者の語り				χ^2 値	df
	自由な語り		質問B全体			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	12 (-2.74)	12.4**	35 (2.74)	27.3	27.23**	4
段階2	44 (4.31)	45.4**	24 (-4.31)	18.8**		
段階3	34 (0.35)	35.1	42 (-0.35)	32.8		
段階4	7 (-2.07)	7.2*	21 (2.07)	16.4*		
段階5	0 (-2.16)	0.0*	6 (2.16)	4.7*		
段階6	0 (-)	0.0	0 (-)	0.0		
合計	97	100.0	128	100.0		

※()内は残差分析の結果を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$

9)。

(2) B群における3つの質問によって表出された語りに対する評定値の出現度数について

B群には段階5までしか見られなかったため、段階6を削除して分析を行った。各質問によって表出された語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ、有意差が認められた。残差分析の結果、質問B-1は段階2が多く段階3が少なかった。質問B-3は段階2が多かった(Table 10)。

3. 質問A, Bと制作者が言語的やりとり時に感じたこととの関連について

制作者が言語的やりとりにおいて感じたことと、制作者の語りによどのような違いが見られたか検討するため、質問紙調査の結果ごとに質問によって表出された語りの評定値の出現度数を比較した。

Table 9 A群の3つの質問における語りに対する評定値の出現度数

評定値	制作者の語り						χ^2 値	df
	質問A-1		質問A-2		質問A-3			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	9 (0.22)	30.0	11 (-1.52)	20.8	24 (1.27)	33.3		
段階2	12 (3.63)	40.0**	8 (-0.55)	15.1	7 (-2.35)	9.7*		
段階3	6 (-1.37)	20.0	20 (1.45)	37.7	21 (-0.29)	29.2	20.57*	10
段階4	2 (-1.23)	6.7	6 (-0.58)	11.3	13 (1.53)	18.1		
段階5	1 (-1.11)	3.3	6 (0.95)	11.3	6 (-0.02)	8.3		
段階6	0 (-0.86)	0.0	2 (1.20)	3.8	1 (-0.46)	1.4		
合計	30	100.0	53	100.0	72	100.0		

※()内は残差分析の結果を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 10 B群の3つの質問における語りに対する評定値の出現度数

評定値	制作者の語り						χ^2 値	df
	質問B-1		質問B-2		質問B-3			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	8 (-0.22)	25.8	11 (-0.76)	23.4	16 (0.95)	32.0		
段階2	13 (3.80)	41.9**	7 (-0.85)	14.9	4 (-2.50)	8.0*		
段階3	5 (-2.27)	16.1*	19 (1.40)	40.4	18 (0.62)	36.0	18.72*	8
段階4	5 (-0.05)	16.1	7 (-0.35)	14.9	9 (0.39)	18.0		
段階5	0 (-1.42)	0.0	3 (0.69)	6.4	3 (0.56)	6.0		
段階6	0 (-)	0.0	0 (-)	0.0	0 (-)	0.0		
合計	31	100.0	47	100.0	50.0	100.0		

※()内は残差分析の結果を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$

A群

(1) A群における自己像のイメージが生じた時と語りに対する評定値の出現度数について

自己像のイメージが生じた時と語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ、有意差が認められた。残差分析の結果、制作中にイメージが生じた制作者は段階5が多く、制作後に話をする中でイメージが生じた制作者は段階5が少なかった (Table 11)。

(2) A群における自己との照らし合わせの有無と語りに対する評定値の出現度数について

自分自身の気持ちや現実生活に対し目を向けたり、照らし合わせたりしたかどうかと語りの評定

Table 11 A群におけるイメージが生じた時と語りに対する評定値の出現度数

評定値	イメージが生じた時						χ^2 値	df
	制作前		制作中		制作後			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	7 (-0.05)	28.0	14 (-1.21)	23.0	23 (1.22)	33.3	19.14*	10
段階2	4 (-0.20)	16.0	10 (-0.27)	16.4	13 (0.42)	18.8		
段階3	6 (-0.75)	24.0	19 (0.18)	31.1	22 (0.38)	31.9		
段階4	5 (1.03)	20.0	5 (-1.57)	8.2	11 (0.78)	15.9		
段階5	2 (-0.08)	8.0	11 (3.49)	18.2**	0 (-3.37)	0.0**		
段階6	1 (0.82)	4.0	2 (0.98)	3.3	0 (-1.57)	0.0		
合計	25	100.0	61	100.0	69	100.0		

※()内は残差分析の結果を示す。

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 12 A群における自己との照らし合わせの有無と語りに対する評定値の出現度数

評定値	自己との照らし合わせ				χ^2 値	df
	あった		なかった			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	27	24.1	17	39.5	5.934	5
段階2	22	19.6	5	11.6		
段階3	33	29.5	14	32.6		
段階4	17	15.2	4	9.3		
段階5	10	8.9	3	7.0		
段階6	3	2.7	0	0.0		
合計	112	100.0	43	100.0		

値の出現度数について直接確率検定を行ったところ、有意差は認められなかった (Table 12)。

(3) A群における新たな気付きの有無と語りに対する評定値の出現度数について

自分自身の気持ちや現実生活について新たな気付きが得られたかどうかと、語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ、有意差は認められなかった (Table 13)。

B群

(1) B群におけるイメージが生じた時と語りに対する評定値の出現度数について

一番印象的な玩具のイメージが生じた時と、語りの評定値について直接確率検定を行ったところ、

Table 13 A群における新たな気付きの有無と語りに対する評定値の出現度数

評定値	新たな気付き				χ^2 値	df
	あった n=10		なかった n=2			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	34	28.1	10	29.4	6.43	5
段階2	22	18.2	5	14.7		
段階3	33	27.3	14	41.2		
段階4	16	13.2	5	14.7		
段階5	13	10.7	0	0.0		
段階6	3	2.5	0	0.0		
合計	121	100.0	34	100.0		

Table 14 B群におけるイメージが生じた時と語りに対する評定値の出現度数

評定値	イメージが生じた時						χ^2 値	df
	制作前 n=1		制作中 n=7		制作後 n=5			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	7	28.0	15	24.2	14	30.4	12.83	8
段階2	6	24.0	14	22.6	5	10.9		
段階3	6	24.0	25	40.3	13	28.3		
段階4	3	12.0	7	11.3	12	26.1		
段階5	3	12.0	1	1.6	2	4.3		
段階6	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
合計	25	100.0	62	100.0	46	100.0		

有意差は認められなかった (Table 14)。

(2) B群における自己との照らし合わせの有無と語りに対する評定値の出現度数について

自分自身の気持ちや現実生活に対し照らし合わせたかどうかと、語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ、有意差が認められた。残差分析の結果、照らし合わせた制作者は段階2が多い傾向にあり段階3が多かった。照らし合わせなかった制作者は段階2が少ない傾向にあり、段階3が多かった (Table 15)。

(3) B群における新たな気付きの有無と語りに対する評定値の出現度数について

自分自身の気持ちや現実生活について新たな気付きが得られたかどうかと、語りの評定値の出現度数について直接確率検定を行ったところ、有意差は認められなかった (Table 16)。

Table 15 B群における自己との照らし合わせの有無と語りに対する評定値の出現度数

評定値	自己との照らし合わせ				χ^2 値	df
	あった n=7		なかった n=5			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	21 (-0.47)	25.9	14 (0.47)	29.8		
段階2	19 (1.79)	23.5 [†]	5 (-1.79)	10.6 [†]		
段階3	20 (-2.57)	24.7 [*]	22 (2.57)	46.8 [*]	9.75 [*]	4
段階4	16 (1.34)	19.8	5 (-1.34)	10.6		
段階5	5 (1.04)	6.2	1 (-1.04)	2.1		
段階6	0 (-)	0.0	0 (-)	0.0		
合計	81	100.0	47	100.0		

※()内は残差分析の結果を示す。

† $p < .1$, * $p < .05$

Table 16 B群における新たな気づきの有無と語りに対する評定値の出現度数

評定値	新たな気づき				χ^2 値	df
	あった n=8		なかった n=4			
	出現度数	出現率	出現度数	出現率		
段階1	21	25.3	14	31.1		
段階2	15	18.1	9	20.0		
段階3	29	34.9	13	28.9	1.72	4
段階4	15	18.1	6	13.3		
段階5	3	3.6	3	6.7		
段階6	0	0.0	0	0.0		
合計	83	100.0	45	100.0		

考察

1. 自由な語りと質問 A, B によって表出された語りに対する評定値の出現度数について

(1) A 群における比較

自由な語りと質問によって表出された語りには有意差が認められなかった (Table 7)。自己像は、必ずしも作品中に存在するとは限らない (河合, 1969) ことから、自己像が想定されずに制作した場合、言語的やりとりにおいて初めて自己像を捉えようとするため表面的な語りになった可能性がある。以上より、自己像に関する質問を行っても自己理解が促進されにくいことが示唆された。

(2) B 群における比較

質問を行うことで段階 1, 4, 5 が増加した (Table 8)。選択した玩具は制作者の個人的体験を想起させる (楠本, 2012) ため、イメージが広がりやすかったと考えられる。以上より、一番印象的な玩具に関する質問を行うことで、自己理解が促進されやすいことが示唆された。

2. 質問 A, B を構成する 3 つの質問項目における語りの評定値の出現度数について

(1) 質問 A-1, A-2, A-3 の比較

質問 A-1 では段階 2 が多く、質問 A-3 では段階 2 が少なかった (Table 9)。制作者の思いを引き出す質問 A-3 は、自分の体験や感情に関する語りがより表出されるため、感情が付与されない語りが減少したと考えられる。以上より、自己像の同定だけでは感情が語りに反映されにくく、さらに質問を重ねる必要があることが示された。また、段階 5, 6 に有意差が認められなかったことから、本研究で設定した質問項目を再検討する必要があることが示唆された。

(2) 質問 B-1, B-2, B-3 の比較

質問 B-1 は段階 2 が多く段階 3 が少なく、質問 B-3 は段階 2 が少なかった (Table 10)。B 群も A 群同様、制作者の思いを引き出す質問 B-3 を行うことで、感情が付与されない語りが減少したと考えられる。以上より、一番印象的な玩具に関する質問においても、玩具の同定だけでなくさらに質問を重ねる必要があることが示された。また、段階 5 や段階 6 に有意差が認められなかったことから、本研究で設定した質問項目を再検討する必要があることが示唆された。

3. 質問 A, B と言語的やりとり時に制作者が感じたこととの関連について

(1) A 群における質問紙調査の結果との比較

自己像に関するイメージが生じた時については、制作中にイメージが生じた制作者に段階 5 が多かった (Table 11)。後藤 (2004) は、イメージと表現されたものが照合する過程において、身体の内側の感覚に導かれて「さぐり」の運動が行われると論じている。本研究で制作中にイメージが生じた制作者は、言語的やりとりで制作中にさぐった体験についてそのまま語ったため、探索的な語りが多かったと考えられる。一方、話をする中でイメージが生じた制作者は段階 5 が少なかった。自己像が想定されていない場合、立会者の質問によって初めてイメージされるため、表面的な語りにとどまってしまうことが明らかになった。以上より、自己像に関する質問はイメージが生じた時によって自己理解の促進されやすさに違いがあることが示唆された。

自分自身の気持ちや現実生活に対して照らし合わせたかどうかについて検討を行った (Table 12)。本研究では段階 5 を自分自身との照らし合わせがなされた段階とみなし、自分自身と照らし合わせた制作者は段階 5 の語りが多く見られると考えられたが、有意差が認められなかった。自分自身との照らし合わせがあった制作者は 12 名中 9 名であったことから、実際には自分自身の気持ちや現実生活に対して照らし合わせていても、その内容について立会者に語られなかったものも多いと考えられる。

自分自身の気持ちや現実生活について新たな気付きが得られたかどうかについて検討を行った (Table 13)。本研究では段階 6 を新たな気付きが得られた段階とみなし、新たな気付きが得られた制作者は段階 6 の語りが多く見られると考えられたが、有意差が認められなかった。新たな気付きが得られた制作者は 12 名中 10 名であったことから、実際には新たな気付きがあったとしても、そ

の内容について立会者に語られなかったものも多いと考えられる。

(2) B群における質問紙調査の結果の比較

一番印象的な玩具に関するイメージが生じた時について、有意差はみられなかった (Table 14)。以上より、一番印象的な玩具に関するイメージが生じた時がいつであっても、自己理解の促進の程度に差がみられないことが明らかになった。

自分自身の気持ちや現実生活に対して目を向けたり、照らし合わせたりしたかどうかについて、検討を行った (Table 15)。自己との照らし合わせがあった制作者は段階2が多い傾向にあり、段階3が少ない傾向にあり、自己との照らし合わせがなかった制作者は段階2が少ない傾向にあり、段階3が多い傾向にあったが、段階5の出現度数に有意差が認められなかった。自分自身との照らし合わせがあった制作者は12名中7名であったことから、実際には自分自身の気持ちや現実生活に対して照らし合わせていても、その内容について立会者に語られなかったものも多いと考えられる。

自分自身の気持ちや現実生活について新たな気づきが得られたかどうか検討したところ、語りに対する評定値の出現度に有意差が認められなかった (Table 16)。新たな気づきが得られた制作者は12名中8名であったことから、実際には新たな気づきがあったとしても、その内容について立会者に語られなかったものも多いと考えられる。

総合考察

1. 本研究の成果

研究1では、先行研究をもとに (平松ら, 1998 ; 平松, 2010) 制作者の語りから C-EXP_{SP} スケールの評定基準を細分化することで新たな評定基準を作成し、語りの例文を追加したことにより、評定基準の曖昧さを減少させ、評定者間の不一致がより少なくなることが期待できる。

研究2では、大学生を対象とした箱庭制作後の言語的やりとりにおいて、自己理解が想定される自己像についての質問と一番印象的な玩具についての質問が有する効果を明らかにした。

自己像についての質問では、複数の質問を行っても語りの変化が見られにくいことが示唆された。また、自己像についてのイメージがいつ生じたかによって自己理解の促進の程度に差が見られることが明らかになった。一番印象的な玩具に関する質問については、質問によって語りが深まり自己理解を促進させやすいことが明らかになった。また、複数の質問を行っても語りが深まらないことが明らかになった。さらに、自己像または一番印象的な玩具のどちらの質問においても、実際には語られなくても自分自身に目を向けたり、新たな気づきが得られた可能性が示唆された。

2. 本研究の限界と今後の展望

(1) C-EXP_{SP} スケールの評定基準について

まず、評定基準の信頼性の向上が課題として挙げられる。本研究では、安定した信頼性が得られたかについては検討できていない。たとえば段階5において、本研究で得られた語り以外にも探索的な語りと認められるものが存在する可能性がある。また、探索的な語りと評定する際、制作時の体験を思い出しているのか、制作時の体験に合う言葉を探しているのか、今ここで自分自身と向き合いながら話す内容を推敲しているのか判別が困難であった。したがって、今後は制作者の語りに

ついて更なる収集を行い、信頼性の検討を行うことが必要であると思われる。

(2) 自己理解を促すための質問について

「自己像」および「一番印象的な玩具」について、本研究で構成した3つの質問では自己理解が促進されたと見なされる段階5以降の出現に差がみられなかったため、その質問項目について再検討する必要があると考えられる。また段階1に【質問について問い直しをしたもの】という評定基準を作成したが、これは先行研究（平松ら、1998；平松、2010）に見られていないため、本研究における質問の教示についても再検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 青木万里（2010）. 自己理解研究——自己-他者理解プログラムの分析を通して 國學院大學紀要, **48** (10), 1-15.
- 後藤美佳（2004）. 箱庭表現に伴う「ぴったり感」に関する基礎的研究——箱庭体験過程スケール（EXPspスケール）からのアプローチ 仏教大学教育学部学会紀要, **3**, 151-168
- Gendlin,E.T., Zimring,F. (1955). The qualities or dimensions of experiencing and their change. *Counseling Center Discussion Papers*,**1**(3).
- 平松清志（2010）. 「箱庭療法面接のための体験過程スケール」を活用した箱庭療法家の訓練に関する一試論 人間性心理学研究, **18** (1), 34-45.
- 平松清志・池見 陽・山口茂嘉（1998）. 箱庭療法面接のための体験過程スケール作成の試み 人間性心理学研究, **16** (1), 65-76.
- 池見 陽・吉良安之・村山正治・田村隆一・弓場七重（1986）. 体験過程とその評定——EXP スケール評定マニュアル作成の試み 人間性心理学研究, **4**, 50-64.
- 皆藤 章（1991）. 風景構成法における風景の中の自己位置 心理臨床学研究, **8** (3), 66-74.
- 河合隼雄（1969）. 箱庭療法入門 誠信書房
- 河合隼雄・中村雄二郎（1993）. トボスの知——箱庭療法の世界 TBS ブリタニカ
- 木村晴子（1985）. 箱庭療法—基礎的研究と実践 創元社
- Klein,M.H., Mathieu-C.P. & Kiesler,D.J. (1970). The Experiencing Scale : A Reserch and Training Manual Vol.1. *Wisconsin Psychiatric Institute*.
- 楠本和彦（2012）. 箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用（交流）に関する質的研究 箱庭療法学研究, **25** (1), 51-64.
- 三木アヤ・光元和憲・田中千穂子（2005）. 体験箱庭療法——箱庭療法の基礎と実際 山王出版
- 中野江梨子（2010）. PDI の前後における風景構成法体験の変化について 心理臨床学研究, **28** (2), 207-219.
- 岡田康伸（1984）. 箱庭療法の基礎 誠信書房
- 高橋雅春（1986）. HTPP テスト 臨床描画研究, **I**, 50-67.
- 高橋依子（2007）. 描画テストの PDI によるパーソナリティの理解——PDI から PDD へ 臨床描画研究, **22**, 85-98.